

《書 評》

大西秀之著 『技術と身体の民族誌』

— フィリピン・ルソン島山地民社会に息づく民俗工芸 —

昭和堂, 2014年, ISBN-10: 4812213568 6,600円

天 野 太 郎



本書は、現代社会学部社会システム学科の大西秀之氏による最新刊であり、氏の専門である文化人類学、なかでもフィリピン・ルソン島をフィールドとした研究書である。さまざまな領域からフィールド研究に携わる研究者にも幅広く一読いただきたいという想いと、さらには本学学生諸姉にも、氏の学問・研究に対する真摯な姿勢や視座、そして方法論に触れてもらいたいという考えから、筆者は本書とは専門外(人文地理学)の立場ではあるものの、本来文化人類学と地理学とが密接に関連してきた隣接分野であることと、そもそも本書の持つ研究視点や方法論が、単に文化人類学固有の学問領域の枠組みにとどまらず、京都学・観光学コースやビジネス・マネジメントコースなど広く地域研究や社会調査を志す学生にとっても有効な着眼点を提供しているものであることから、僭越ながら本誌にて紹介させていただきたい。

本書は以下のような章から構成されている。

- 第1章 技術をモノ語る苦難と悦楽
- 第2章 技術を語る民族誌の新たな地平
- 第3章 社会に形作られた土器製作者の身体
- 第4章 土器製作者の誕生とジェンダーの再生産
- 第5章 社会的実践としての工芸技術の変容
- 第6章 市場経済による伝統工芸の再生
- 第7章 民族誌から展望する技術研究

本書は、フィリピン・ルソン島北部の山岳民であるカンカナイ社会における土器作りの地域調査と、そこから描出される民族誌を軸として、人類学の研究史や方法論に関する批判的分析と、そこから導き出される諸課題を織り込みながら展開されている。土器作りという一見地味に見える「技術」についての実態調査であるが、そうした技術に関する研究は人類学において低調であり、言語偏重主義がその背景にあるとの立場から、この地域調査の意義が語られている。こうした言語化できない技術、そして言語にとらわれることなくモノを語ることができないとしつつも、文化人類学における近年の言説を批判的に検証しつつ、モノを語ろうとする大きな「企て」の書である。

そうした技術の研究、あるいはフランス人類学やプロセス考古学の役割を研究史の中で編み出す大西氏のおおきな研究目的とはやや逸れる

との誇りを受けるかもしれないが、評者が自らの研究領域、また本学の学生に読み取ってもらいたいポイントとして、以下のような点が指摘できる。

まず第一に学生にも学び取ってもらいたい点は、こうしたフィールドワーク研究を語る際に、その背景となる研究史について、その現状や課題を批判的に分析し、そして語る姿勢である。たとえば、本書の冒頭では大きな紙幅を割いてフランス人類学とプロセス考古学の関連研究が語られ、ルロワ＝グーランが提唱したシェーン・オペラトワール論の独創性と重要性—すなわちさまざまな異なる機械的な動作が、不可逆的な時間の流れの中で連続的に配列されることによって技術的实践がなされるという認識を示したことを本書では語りながら、氏のフィールド研究の視座が相対化され位置付けられていく様相が鮮やかに語られていく。こうした先行研究の分析や、そこから導き出される自身の視座の相対化、といったことは、特に近年の卒業論文には不足している部分とも考えられるし、その姿勢の重要性を再認識してもらいたい。

次に、他分野へのまなざしが多岐にわたっている点にも注目される。たとえばこのフィールド対象地域で行われている営みは、土器作り＝女性、木工品＝男性というジェンダーを見いだすことができ、そうしたジェンダーの再生産が語られている。あるいはこの対象地域そのものがエスニシティ、人口流動の問題など、今日の日本の社会構造が直面している問題とも共通する課題が語られており、まさに現代社会学部社会システム学科の5つの学びのコースに広く跨る視座から地域社会が語られている点にも注目されよう。「国際理解コース」のなかの文化人類学の専門教員、として学生からは見られるかもしれないが、そうした小さく人為的な枠組みを超えた研究視座を提供してくれる書であろう。このことは、大西氏が人類学のみならず考古学

の研究トレーニングをも積まれてきた広領域にわたる研究歴とも深く関連しているものと考えられる。

そして、最後に指摘しておきたいのは、本書において説かれるのは、フィールドワークの重要性である。フィリピン・ルソン島という言語的にも社会生活的にもおおきな障壁のある環境下において、長期間現地の「技術」を凝視し、時に語り合い、また実践する氏のフィールドワークの真摯な姿勢には注目されるとともに、本学の様々な教育プログラムにおいても、安易に「フィールドワーク」という言葉が多用されているものの、その実態と比較すると同じ用語であることが恥ずかしく、憚られる想いである。フィールドワークとは何か、何を持ってフィールドワークというのか。同じ地域研究を目的とする評者にとっても考えさせられる姿勢である。これからゼミでフィールドワークを計画する学生、また評者自身が北海道や東北で「フィールドワークなるもの」を企画する際、同じ概念ではあり得ないものの大西氏の姿勢を意識し、そこから看取すべきことがらは多いように思われる。

以上のような視点も含め、大部で時には難解な研究論も語られるものの、大西氏の授業内外で見られる「饒舌さ」と「博識」が本書には詰め込まれている。すぐに読めて理解できる一般書ではないからこそ、学生諸氏にはこうした本書を手にとっていただき、その理解を進める上でも、また単に人類学にとどまらない幅広い知の世界に触れる意味でも、大西氏の講義や演習に臨んでもらいたい。